



「考えるということ」



フランスの有名な数学者・哲学者にブレーズ・パスカルという人がいますが、彼は「人間は考える^{あし}葦である」という有名な言葉を残しています。多分みなさんもどこかで出会ったのではないのでしょうか。厳密に言えば彼は、彼の著作『パンセ』でこう言っています。

人間は一本の葦にすぎない。

自然の中で最も弱いものの一つである。

しかし、それは考える葦なのだ。

人間を葦にたとえたパスカルの着想は^{たくぼつ}卓抜だと言わざるを得ません。少し風が吹けばなぎ倒されてしまうような、もろくはない一本の葦。しかし、その葦は考えるということで、どんな強敵にも立ち向かうことが出来ると彼は言います。考えることで人間は強く生きることが出来るということです。これは非常に重要なアドバイスだと言えないでしょうか。何か困難に出会った時、その場その場であたふたすることなく、どう対応すればいいのかをまず考えることが、問題の解決への糸口につながっていくのではないのでしょうか。

考えることが全くない、ただ、感じるままに生きるという人生もあります。それはそれで楽しく、パスカルの言う「気晴らし」につながる生き方かもしれません。ただ、後には何も残らない、気晴らしをした後の空しさだけがそこにあるということになります。

たとえば、パスカルと同時代に活躍した同じフランス人哲学者ルネ・デカルトは、よりストレートに「我考える ゆえに我あり」と言っています。考えるということを自分からなくしてしまうと、自分を取り巻く世界は存在しないのと同じだと言っているのです。たしかに様々なものを見て考えるからこそ人間であり、考えることをなくしてしまえば、ただの生き物に過ぎなくなってしまうかもしれません。しかし、簡単に考えるといっても、実は難しい行為かもしれないのです。何を考えればいいのか、どんな風に考えたことを結果に生かせばいいのか、生き方にどう取り入れていけばいいのか、課題は山積みされたままです。

高校生のみなさんにとって、考えることの大事さはまだあまりピンと来ないかもしれません。SNS全盛の現代にあって、少し立ち止まって物事をじっくり考えるということは、かなり難しいことなのではないでしょうか。ただ、考えるということをなくしてしまうと、間違った方向を選択したり、予想もしない結果を招くかもしれないのです。

「考える」ということを、人間の生き方の基本として、生活にぜひ取り入れてほしいと思います。